

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、17ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・I・U・Eのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消し残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 潮流逆巻く激動の時代をたくましく生きる。
- (2) 恩師の一言は私の心の琴線に触れた。
- (3) 養蜂場の経営を始める。
- (4) 消費量に合わせて生産量を通減する。
- (5) 夏炉冬扇とならないように注意する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 班長として班をタバねる。
- (2) 江戸時代からレンメンと受け継がれている技術。
- (3) サンセキした仕事を一つずつ処理する。
- (4) この企画の成功は今後を占うシキンセキだ。
- (5) 自然に囲まれてコウウンリュウスイの生活を送る。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

「夫」と「妻」は、大家である老夫婦(「おじちゃん」と「おばちゃん」)の家の二階部分を借りて住んでいる。八年間住んだその家からの引越しの日が近付き、夫婦と老夫婦の四人は、老夫婦の家で食事会を行っている。

A 私のいちばん好きな時間はですね、と妻はおじちゃんに話しかけた。朝、布団ふとんのなかで目を覚まして、布団から出ずにぬくぬくしている時間です。B 一つの季節もその時間が好きだけれど、なかでもちようどいまぐらいの、春先。冬の寒さがやわらいで、朝でも室内の気温はそこまで寒くなくて、けれども冬の厚い布団をかぶって、寝ているあいだに温まった布団のなか、自分の体のまわりは自分の肌の一部みたいになじんでいる、その状態に身を置いて、目覚めと眠りの狭間はざまにいるとき。

二階の私たちが住んだ部屋は、冬でも結構あたたかかった。妻がはじめてここを訪れた日に見た日当たりのよさのおかげもあるだろうけど、もうひとつは一階のおじちゃんとおばちゃんの部屋の熱が天井から二階へと伝わるから。それは、ここに住んでいるあいだ何度もおじちゃんから聞いた。たとえば冬の朝、あのいちばん好きな布団のなかの時間からようやくと抜け出して、仕事に行こうと表に出たところで、まだ庭で仕事*をしていた頃のおじちゃんと会う。おじちゃんは仕事中は長袖のワイシャツを着て、つばの大きなハットを被かぶっていた。作業用の帽子にしては造作がドレッシーで、たぶん本来は帽子屋さんで売っているようなフェルトハットだと思うのだが、長年使われてすっかり汚れてくたびれていた。

寒いですね、と妻は声をかける。風邪ひかないようにしてくださいね。

おじちゃんの返事は、うん、とか、ありがとうね、とか短いことが多かったけれど、ときどき、二階は寒くないでしょ、と言ってくることもあった。

寒くないことはないし、妻は寒さが苦手なのでつい、寒いですよ、と応えることもあった。しかし、この家は二階はあったかいんだよ、とおじちゃんに言われて、そうだった、と思います。私たちの家はあったかい。一階の熱が上にかかるから、ともう何度も聞いたその理由をおじちゃんから聞かされて、そうです、あったかいです、と応える。ほかとくらべてどうかかわからないけど、あったかいです、と思います、ともういつもあったかいかから、ほかの家とくらべられない。いつもよく日が入るから、くらべられない。

物件を見にいったときに、いまの家より暗く感じることはあっても、あたたかさは暮らしてみないとわからない。きつと、暮らしはじめてこの家があたたかかったことに気がつく。思い出す。

(1) 妻はまだ知らぬそのときのことを考えた。前の家のあたたかさを思い出すときのことを、想像してみる。きつと思いつくのは布団のなかにいる、妻のいちばん好きな時間ではないか。春先に、この家の寝室の、布団のなかにいるときのこと。敷布しきぬのも毛布けふのも全部自分と同じ温度になったみたいなああの場所のこと。ああ、あの温ぬくみには、あの家のあたたかさも混ざっていたんだ。一階のおじちゃんとおばちゃんの部屋の、暖房とか、おじちゃんおばちゃんの体温とかさういう全部が混ざって、天井から、私たちの部屋の床へと伝わって、私たちの部屋の温度を温め、
C 私の布団の温度を温めていた。

(2) おばちゃんの話は続いていたが、それはやっぱり窓越しに聞くようでは上手に聞き取れず、妻は明るい窓の外で暖気になって二階へのぼり、寝室のなかの布団を温めに行く。自分を布団のなかに送り届けたような気持ちになつて、いまいる部屋で少し我に返った妻は、正面にいるおじちゃん

んに、おじちゃんがいちばん好きな時間はなにしてるときですか、と訊ねた。

向かい合わせに座っていたおばちゃんと夫の話が続くなか、突然妻がおじちゃんに投げかけたその言葉で、なにかその場にふたつの対話が十字に生じることになった。夫は驚いたが、話を向けられたおじちゃんはそれまで続いていたおばちゃんの話はあまり聞かえずとも妻のその聞いかけはしつかり聞こえたようで、えー、と困ったような返事をした。妻の言い方は、ちゃんと聞こえるような話しかけ方になっていったのだ。

いちばん好きな時間は特にないよ、とおじちゃんは応えた。

お酒飲むとかご飯食べるとかもですか？

うん。

あ、旅行は？

旅行は好きだね。でももうなかなか行けないしね。

⁽⁴⁾ そんなことないでしょう、と妻は言った。去年もおじちゃんたちは北海道に旅行に行ったし、その前年には娘さんと一緒に韓国にも行っていった。夫婦は、そのお土産をもらい、旅行の土産話を聞いた。そして驚き感心した。おじちゃんは九十歳を超えているし、おばちゃんも足がよくない。それでも旅行に行こうと決めて行くのだから気が若い、だからいっそ元気でいられるのだろうと言いつつ。

このひとはね、とおばちゃんが自分の話を止めて、横にいる妻の方を向いて言った。仕事がいちばん好きだったんですよ。

夫は、おばちゃんの話が切れたので、寿司に箸を伸ばした。イカの握りを選んで頬張った。妻はお寿司でいちばん好きなのは玉子で、玉子があれば最初に玉子を食べる。四人前の桶のなかに玉子の握りは四貫あったが、今日もそのうち二貫を食べていた。二貫目を口に入れたときにはとして夫に目配せをしたら、夫は自分は玉子は食べないから構わないけれどもあとの二貫はおじちゃんとおばちゃんが食べるかもしれないから

ストップ、と目配せを返した。

若い頃から仕事だけで、遊びは全然しなかったんです。旅行もね、連れてってもらったのは年とってからですよ、とおばちゃんは妻と夫に顔を振り分けながら言った。まじめだけでつまらないひとなんですよ、とおばちゃんは笑い、おじちゃんに、ね、と顔を向けた。

うん、とおじちゃんは短く応えようと、表情が少し変わった。照れているようにもよるこんでいるようにも見えたけれど、照れだとしても嬉しいのだとしても、その感情の細かいところはよくわからない。おじちゃんが鉄火巻きに箸を伸ばして口に入れた。

仕事は本当に一生懸命にやりました、とおばちゃんは言った。おばちゃんの相好も一言ごとに微妙に変わった。いまは少々険しい、真剣な表情になっていて、その顔を向けられた夫婦はおばちゃんの誇りのようなものを感じとった。夫はまだイカを噛んでいた。昔は余裕もなかったですから、いまもないですけどね、でももっともっと大変でしたから、休みもせず働きましたよ。子ども育てながら、大変でしたけど、がんばりました。ね、お父さん、とおばちゃんはまたおじちゃんに顔を向けた。おじちゃんは、うん、とまた応えた。

私はね、仕事はできませんから、家のことしか、とおばちゃんはまた少し柔らかな表情になる。だから、感謝してらんです、ほんとうに。まあそうやってどうにかこうにかふたりでこの年までこうしていられるんですから、よかったのかもしれないね。おばちゃんがほとんどしゃべっているが、そこにあるのは、おじちゃんとおばちゃんふたりの声のように夫婦には思えた。

(滝口悠生「長い一日」による)

〔注〕 仕事——おじちゃんは自宅の庭で鉄鋼を解体する仕事をしていて。

あまり聞かえず——おじちゃんは近年、周囲の会話が聞き取りづらくなっている。

〔問1〕⁽¹⁾ 妻はまだ知らぬそのときのことを考えた。とあるが、ここでの

「妻」の心情の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 新しい家の暮らしでは、今の家とは違うどんなあたたかさを体感でき
きるのだろうか
イ 新しい家の暗い寝室では、今の家の明るさをもたらすあたたかさは
得られないだろうか
ウ 新しい生活を始めたなら、今の家での生活の断片をなつかしく思い出
すのだろうか
エ 新しい生活に慣れたら、今の家の過ごしやすさを自然と自覚できる
ようになるだろうか

このとき、妻は、

ア 新しい家の暮らしでは、今の家とは違うどんなあたたかさを体感でき
きるのだろうか
イ 新しい家の暗い寝室では、今の家の明るさをもたらすあたたかさは
得られないだろうか
ウ 新しい生活を始めたなら、今の家での生活の断片をなつかしく思い出
すのだろうか
エ 新しい生活に慣れたら、今の家の過ごしやすさを自然と自覚できる
ようになるだろうか

このとき、妻は、

ア 新しい家の暮らしでは、今の家とは違うどんなあたたかさを体感でき
きるのだろうか
イ 新しい家の暗い寝室では、今の家の明るさをもたらすあたたかさは
得られないだろうか
ウ 新しい生活を始めたなら、今の家での生活の断片をなつかしく思い出
すのだろうか
エ 新しい生活に慣れたら、今の家の過ごしやすさを自然と自覚できる
ようになるだろうか

〔問2〕⁽²⁾ おばちゃんの話は続いてきたが、それはやっぱり窓越しに聞く
ようでも上手に聞き取れず、妻は明るい窓の外で暖気になって二階

へのぼり、寝室のなかの布団を温めにいく。とあるが、このとき

の「妻」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 老夫婦とうまく会話がかみ合わず、嫌気がさして気分転換にお気
入りの寝室に行きたくなっている様子。
イ 食事会の席にもかかわらず、周囲の人々の存在に対する意識が薄れ
て自らの空想の世界に没入している様子。
ウ 好きな時間について話すうちに、布団のぬくもりが気になりだして
早く席を外したい衝動にかられている様子。
エ おばちゃんの話聞き流すことで、おじちゃんとの会話を弾ませる
ための話題探しに集中している様子。

このとき、妻は、

ア 老夫婦とうまく会話がかみ合わず、嫌気がさして気分転換にお気
入りの寝室に行きたくなっている様子。
イ 食事会の席にもかかわらず、周囲の人々の存在に対する意識が薄れ
て自らの空想の世界に没入している様子。
ウ 好きな時間について話すうちに、布団のぬくもりが気になりだして
早く席を外したい衝動にかられている様子。
エ おばちゃんの話聞き流すことで、おじちゃんとの会話を弾ませる
ための話題探しに集中している様子。

このとき、妻は、

〔問3〕⁽³⁾ えー、と困ったような返事をしたとあるが、このときの「お

じちゃん」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 「妻」の質問を優先させねばならなくなり、話し続けている「おばちゃん」に後ろめたさを感じている様子。

イ 「妻」の工夫した話し方で問いが明確に聞こえ、「妻」と話さざるをえなくなった状況を嫌がっている様子。

ウ 「妻」の問いへの答えが「仕事」以外には思いつかずに、これまでの自分の人生を味気なく思っている様子。

エ 「妻」の質問にしっかりと対応しようとしながらも、とっさには適当な答えが思いつかず戸惑っている様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ そんなことないでしょう、と妻は言った。とあるが、「妻」は

どのような気持ちで言ったのか。五十字以上六十字以内で説明せよ。

〔問5〕 おばちゃんがほとんどしゃべっているが、そこにあるのは、お

じちゃんとおばちゃんふたりの声のようにも夫婦には思えた。と

あるが、この理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア おばちゃんしかほぼ話していないが、時折おばちゃんがおじちゃん
の顔を見る様子や、おじちゃんが相づちを打つ様子に夫婦として長年
連れ添ってきた両者の信頼関係を感じとることができたから。

イ おじちゃんとおばちゃんが互いを信頼して仕事と家事を分担してき
たように、話をするのはおばちゃんだけの特権だが、その言葉にはお
じちゃんの意味も含まれていると感じとることができたから。

ウ おじちゃんがおばちゃんの表情が変わる度に同調して表情を変え続
けていく様子を見ると、発言は少ししかないものの、おじちゃんのお
ばちゃんへの肯定と信頼を強く感じとることができたから。

エ おばちゃんが話している間に食事をしたり、話も相づちのみで取り
合おうとしなかったりするおじちゃんの態度によって、かえって簡単
には揺るがない両者の信頼関係を感じとることができたから。

〔問6〕 本文の表現について述べた説明として最も適切なものは、次のう

ちではどれか。

ア 私のいちばん好きな時間はですわね、と妻はおじちゃんに話しかけた。
のようにかきかっこを一切用いずに、地の文にそのまま登場人物の会
話を入れ込む手法によって、登場人物同士の心情的な隔たりが印象づ
けられている。

イ 一つの季節もその時間が好きだけれど、なかでもちようどいまぐら
いの、春先。のように妻の会話や妻の心の中を描く部分では、名詞で
文を終える表現が用いられることで、煮え切らない妻の態度が描き出
されている。

ウ 私の布団の温度を温めていたのような登場人物の視点に立った描写
と、夫は驚いたが、のような第三者の視点での描写が混在しており、
視点の移動が柔軟に行われることで、作品世界が広がりのあるものと
なっている。

エ おじちゃんが鉄火巻きに箸を伸ばして口に入れた。夫はまだイカ
を噛んでいた。のように話題とは無関係な描写を適宜挟むことで、話
題の転換点が自然なものとなるとともに、会話が臨場感をもつものと
なっている。

次の文章は大正時代に書かれたものである。次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

骨董趣味とは主として古美術品の翫賞（*がんとくしょう）に関して現われる一種の不純な趣味であつて、純粹な芸術的の趣味とは自ら區別さるべきものである。古画や器物などに「時」の手が加わつて一種の「味」が生じる。あるいは時代の匂（におい）というようなものが生じる。またその品物の製作者やその時代に関する歴史的聯想（*れんそう）も加わる。あるいは昔の所蔵者が有名な人であつた場合にはその人に関する聯想が骨董的の価値を高める事もある。あるいはまた単にその物が古いために現今稀有（けう）である、類品が少いという考（かんが）に伴う愛着の念が主要な点になる事もある。この趣味に附帯して生ずる不純な趣味としては、かような珍品をどこからか掘出し（ほりだ）てきて人に誇るといふ傾向も見受けられる。この点において骨董趣味はまたいわゆる蒐集趣味（*しゆつゐう）と共有な点がある。マッチの貼紙（はりがみ）や切手を集めあるいはボタンを集め、達磨を集め、はなはだしきは蜜柑（みかん）の皮を蒐集するがごとき、これらは必しも時代の新旧とは関係はないが珍しいものを集めて自ら楽しみ人に誇るといふ点はやはり骨董趣味と共通である。

科学者の修得し研究する知識はその本質上別にそれが新しく発見されたか旧くから知られているかによつて価値を定むべきものではない。（2）科学上の真理は常に新鮮なるべきもので骨董趣味とは没交渉であるべきように見える。しかし実際は科学上にも一種の骨董趣味は常に存在し常に流行しているのである。

もし科学上の事実や方則（*）は人間未生以前から存して、ただ科学者のこれを発見し掘出すのを待つてにすぎぬと考える者の立場から見れば、このくらい古い物はない道理である。こういう意味からすれば科学者の探求的慾望は骨董狂の掘出し慾と類する点があると云われ得る。しか

また他の半面の考え方によれば科学者の知識は「物自身」の知識ではなくて科学者の頭脳から編み上げた製作物とも云われる。（3）そう考えれば科学者の欲求は芸術家の創作的慾望と軌を一にするわけである。しかしこういう根本問題は別としてもまだ種々な科学的骨董趣味が存在するのである。

一口に科学者とはいうものの、科学者の中には種々の階級がある。科学の區別は別問題として、その人々の科学というものに対する見解やまたこれを修得する目的においても十人十色と云つてよいくらいに多種多様である。実際そのためにおのおの自己の立場から見た科学以外に科学はないと考えるために種々の誤解が生じる場合もある。これらの種類を列挙するのは本文の範圍以外になるから、これは他日に譲るとして、ここにはもっぱら骨董趣味という点から見て二つの極端に位する二種の科学者を対照して見ようと思ふ。

科学者の中にはその専修学科の發達の歴史に特別の興味をもっている人が多数にある。これが一歩進むとその歴史に關したあらゆる記録、古文書、古器物に対してちょうど骨董家がつよな愛好の念をもつてこれを蒐集する人もある。これはまず純粹な骨董趣味と名け得られるものである。また少し種類が違つているが、品物を集めるのではなくて古い書物や論文を愛読してその中からその価値のいかによらず人のあまり知らぬ研究や事実を掘出して自ら楽しみまた人に示すを喜ぶ趣味もある。これは多くの読書家に通有な事であるが、これも一種の骨董趣味と名け得られない事はない。科学の方面で云えば例えばある方則または事実の発見前幾年に誰れがすでにこれに類似の事を述べているといったような事を探索して楽しむのである。

次にもう少し類を異にした骨董趣味がある。一体科学者が自己の研究を發表するに當つてその当面的問題に關した先人の研究を引用し批評するのは當然の務である事は申すまでもない。しかしこれが往々にして骨董

的傾向を帯びる事がある。すなわち当面の問題に多少の關係さえあればこれがいかに目下の研究に縁が遠くまたいかに古くまた無価値ないしは全然間違つたものでも無差別無批評に列挙するというふうの傾向を生じる事もある。この傾向は例えばドイツの物理学者などの中にしばしば見受けるところである。別に咎むべき事でもないと思うがとにかく骨董趣味に類した一種の「趣味」と見ても差支はなからう。

これと正反対の極端にある科学者もある。その種類の人には歴史という事は全く無意味である。古い研究などはどうでもよい。最新の知識すなわち真である。これに達した径路は問うところではないのである。實際科学上の知識を絶対的または究極的なものと信じる立場から見ればこれも当然な事であろう。また応用という点から考えてもそれで十分らしく思われるのである。しかしこの傾向が極端になると、古いものは何物でも無価値と考え、新しきものは無差別に尊重するような傾向を生じやすいのである。

これほど極端でないまでも實際科学者としては日進月歩の新知識を修得するだけでもかなり忙しいので歴史的の詮索までに手の届かぬものは普通の事である。

(4) しかし自分の見るところでは、科学上の骨董趣味はそれほど軽視すべきものではない。この世に全く新しき何物も存在せぬという古人の言葉は科学に対しては必ずしも無意義ではない。科学上の新知識、新事実、新学説といえども突然天外から落下するようなものではない。よくよく詮議すればどこかにそのよつて来るべき因縁系統がある。例えば現代の分子説や開關説でも古い形而上学者の頭の中に彷徨していた幻像に脈絡を通じている。ガス分子論の胚子はルクレチウスの夢みたところである。ニュートンの微粒子説は倒れたがこれに代るべき微粒子輻射は近代に生れ出た。破天荒と考えられる素量説のごときも二十世紀の特産物ではないようである。*エピナスの古い考はケルビン、*タムソンの原子説を産んだ。*デカルトの荒唐な仮説は渦動分子説の因をなしているとも見られる。植物学者*ブラウン

の物数奇な研究はいったん世に忘れられたが、近年に到つて分子説の有力な証拠として再び花が咲いたのである。實用方面でも幾多の類例がある。*ガリレーの空気寒暖計は發明後間もなく棄てられたが、今日の標準はまた昔のガス寒暖計に逆戻りした。*シーメンスが提出した白金抵抗寒暖計はいったん放棄されて、二十年後に*カレンダー、*グリフィスの手によって復活した。(5) このような類例を探せばまだいくらかもあるだろう。新しい芸術的革命運動の影にはかえつて古い芸術の復活が随伴するように、新しい科学が昔の研究に暗示を得る場合ははなはだ多いようである。これに反して新しい方面のみの追究はかえつて陳腐を意味するようなパラドックスもないではない。かくのごとくにして科学の進歩は往々にして遲滞する、そしてこれに新しき衝動を与えるものは往々にして古き考の余燼から産れ出るのである。

現今大戦の影響であらゆる科学は応用の方面に徴発されている。応用方面の刺戟で科学の進歩する事は日常の事であるからこのために科学が各方面に進歩する事は疑を容れない。これは誠に喜ぶべき事である。(6) しかしその半面の随伴現象としていわゆる骨董趣味を邪道視し極端に排斥し、ついに巧利を度外視した純知識慾に基づく科学的研究を軽んずるような事があつてはならぬと思う。直接の応用は眼前の知識の範囲を出づる事はできない。したがつてこれには一定の限界がある。予想外の応用が意外な*閑人的学究の骨董的探求から産出する事は珍しくない。自分は繰返して云いたい。新しい事はやがて古い事である。古い事はやがて新しい事である。温故知新という事は科学上にも意義ある言葉である。また現代世界の科学界に対する一服の緩和剤としてこれを薦めるのもあながち無用の業ではないのである。

(寺田寅彦「万華鏡」による)

〔注〕 翫賞——鑑賞すること。

聯想——「連想」に同じ。「聯」は「連」の旧字体。

蒐集——「収集」に同じ。

方則——「法則」に同じ。

欲望——「欲望」に同じ。「慾」は「欲」の旧字体。

通有——同類のものに共通する性質。

径路——「経路」に同じ。

詮議——評議して物事を明らかにすること。

形而上学——世界の根本的な成り立ちや物や人間存在の理由な

ど、感覚を超越したものについて考えること。

彷徨——さまようこと。

胚子——多細胞生物の個体発生初期のもの。ここでは、比喩的

に、これから育っていく、もともになるもの。

ルクレチウス——紀元前の西洋の哲学者。

輻射——反射。

エピナス、ケルビン、タムソン——近代の西洋の哲学者。

デカルト——近代の西洋の哲学者。

ブラウン、ガリレー、シーメンス、カレンダー、グリフィス

——近代の西洋の科学者。

余燼——古人の残した事跡のおもかげ。

刺戟——「刺激」に同じ。

閑人——世俗を離れた風流人。

〔問1〕⁽¹⁾「一種の不純な趣味」とあるが、「骨董趣味」における「不純な趣

味」の具体例として適切なものは、次のうちではどれか。

ア 世界各地で手に入れた化石のコレクションをととうと自慢する。

イ 所蔵する重要文化財を博物館で期限付きで多くの人に公開する。

ウ 十七世紀のあらゆる陶磁器を大金を払ってでも即座に手に入れる。

エ 最近入手した平安時代の能筆家の書を仲間にはげらさず。

〔問2〕⁽²⁾ 科学上の真理は常に新鮮なるべきもので骨董趣味とは没交渉で

あるべきように見える。とあるが、「科学上の真理は常に新鮮な

るべきもので骨董趣味とは没交渉であるべき」だと考えるとき

科学に対する態度とはどのようなものか。三十五字以上五十字以

内で説明せよ。

〔問3〕⁽³⁾ そう考えれば科学者の欲求は芸術家の創作的慾望と軌を一にするわけである。とあるが、ここでの「科学者の欲求」とはどのようなものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 観察や実験によって得られるデータを使って、原初から存在する科学的事実や法則を発見して世間に発表したいというもの。

イ 観察や実験によって得られるデータを踏まえて、自然界の事実や法則に対する独自の理論を考案して形にしたいというもの。

ウ 観察や実験によって得られるデータをもとにして、定説を念入りに検証して科学的な知識をひたすら修得したいというもの。

エ 観察や実験によって得られるデータを用いて、奇想天外な着想で一つの理論にまとめあげて世の中を驚かせたいというもの。

〔問4〕⁽⁴⁾ しかし自分の見るところでは、科学上の骨董趣味はそれほど軽視すべきものではない。とあるが、なぜ「科学上の骨董趣味」は軽視されてしまうのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 先人の研究や科学発展の歴史に対する過度な関心は、個人的な満足感を満たそうとしているだけに見え、現代の科学の発展に直結しないように思えるから。

イ 先人の研究や科学発展の歴史に対する過剰な関心は、生活の向上という研究の目的を見失うことになり、現代の科学の発展を阻害するよう思えるから。

ウ 先人の研究や科学発展の歴史に対する極度の心酔は、激しい時代の変化から目を背けようとしていると言え、現代の科学の発展に逆行するよう思えるから。

エ 先人の研究や科学発展の歴史に対する極端な心酔は、先行研究の価値を証明することを目的としており、現代の科学の発展とは無関係のよう思えるから。

〔問5〕⁽⁵⁾ このような類例を探せばまだいくらかでもあるだろう。とあるが、「このような類例」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 先人の意外な思いつきが後世の研究の方向性を規定し、理論の成立や発明品の誕生につながったということ。
- イ 先人の果敢な挑戦が後世の研究者の精神的支柱となり、理論の成立や発明品の誕生をもたらしたということ。
- ウ 先人の途方もない夢が後世の研究者に現実を見つめさせ、理論の成立や発明品の誕生を推し進めたということ。
- エ 先人の飽くなき探究が後世の研究者に何らかの啓示を与え、理論の成立や発明品の誕生に貢献したということ。

〔問6〕⁽⁶⁾ しかしその半面の随伴現象としていわゆる骨董趣味を邪道視し極端に排斥し、ついには巧利を度外視した純知識慾に基づく科学的研究を軽んずるような事があつてはならぬと思う。とあるが、筆者がどのように考えるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 現実的な効用や利益を顧みることなく、真理の発見を求めて古い研究を重視する科学的研究こそが、他者の様々な意見を受容する態度を生み、科学の進歩を促進することになるから。
- イ 新しい技術の追究から距離を置き、平和の実現を求めて古い研究に学ぼうとする科学的研究こそが、人類の幸福という意識を持続させ、次の科学的理論を産み出すことに寄与するから。
- ウ 現実的な効用や利益を求めず、本質の解明を求めて過去の研究に目を向ける科学的研究こそが、思いがけない発想をもたらし、新たな科学の進歩につながる可能性を持つから。
- エ 新しい技術への応用という視点を捨て、本来の研究のあり方を求めて先人たちの態度にならう科学的研究こそが、現実の問題を解決する唯一の手段となり、新技術の開発を可能とするから。

〔問7〕 温故知新という事は科学上にも意義ある言葉である。とあるが、世界の未来に向けて「温故知新」が役に立つことはどのようなことがあるか。具体例をあげて、あなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用されている原文の後の〔 〕内は、現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

うたがふな潮の花も浦の春

其角編『いつを昔』には、「二見の図を拝み侍りて」と詞書があり、また世に芭蕉の「二見文台」として伝来するものに、鏡板に扇面と二見が浦の図を描き、裏面に右の句を書き付けたものがある。二見が浦は、歌枕であり、「伊勢神宮の垢離場、参宮者が潮に浴し、また新春の初日の出を拝む」（『芭蕉句集』）所であるが、⁽¹⁾西行とのゆかりも見逃すことができない。それは、

伊勢の二見の浦にて、西行上人扇を開きて仮りに文台となしたる風流より、芭蕉思ひよりて、文台の面に、扇の形書きて、岩二つ注連結びたる体を書けり。

（『芭蕉句選年考』）

伊勢の二見の浦で、西行上人が扇を開いて仮の文台とした風流から、芭蕉が思いついて、文台の表の面に、扇の形を書いて、岩を二つ注連縄で結んだ形を書いた。

とする伝承があるからであり、また、

伊勢にまかりたりけるに、三津と申す所にて、海辺の春の暮と云ふ事を、神主どもよみけるに、

過る春潮のみつより船出してなみの花をやさきにしたつらむ

（『山家集』）

伊勢に参上したところ、三津という所で、海辺の春の暮れということ、神主たちが詠んだので、過ぎていく春は、潮の満ちる三津の浜から、波の花ともいべき白波を触先に立てて、船出して行くことであろう。

の一首が、いま芭蕉の一句の「潮の花」にかかわるからでもある。

しかし「潮の花」は、めずらしい言葉である。ふつうには、「潮の花とは、海辺に潮先きの白く散るのを花と見立てて言つた語」（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）と解されるが、国語辞書の類には、この語を登載するものがない。かわりに「シオバナ（塩花・潮花）」があり、『日葡辞書』の例などによって、「白波。満潮の時など、潮の飛び散る様子が花のようであると云うところから」と説明される。この「シオバナ」が、いまこの句において、⁽²⁾五七五各句の頭韻を「ウ」で揃えるために「ウシオノハナ」といになされたのであろう、というのである。ただし、一方ではまた、一句を、

この二見が浦では、夫婦岩に砕け散る波の花までも、めでたい新春を寿いでいるのだ。この神境の尊さを、ゆめゆめ疑うまいぞ。

（『芭蕉句集』）

と口語訳する説があるように、「潮の花」を「波の花」と解して済ませる説が多い。しかし、「波の花」ならば、『古今集』以来の歌語である（「草木も木も色変れどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」）が、これは、満潮・干潮にかかわりなく、

波の白きを花に見なしたり

（『まさな草』）

波の白い様子を花に見なしている。

というように、波頭一般をいうのである。そして右の口語訳が、そうであ

るように、「潮の花」を「波の花」と解した場合に、ここでは、満潮の意義が捨てられてしまう。「潮の花」が、「シオバナ」からいいなされたものか、「波の花」の単なるいい換えかは、にわかには決め難いかに見えるが、ここは、やはり、満ちて来る潮の花であろうと思う。それは、西行歌にいうように、「潮のみつ」ときにこそ、「なみの花」は最も、はなばなしからであり、また、これを単に「砕け散る浪の花」と解するよりも、ひたひたと満ちて来る海を句の底に見る方がはるかに一句の迫力を増すからである。そして、その迫力は、確実に一句の意味にかかわるからである。

「うたがふな潮の花も」は、倒置として、本来「潮の花もうたがふな」の意味であろうと思われる。「うたがふな」が「神仏の威徳を説く時の常套語」(『芭蕉句集』)であることは、事実であり、念のために例を挙げれば、ゲニモ此ノ事、目ノ前ノ証拠ナリ。不レ可レ疑。(『捨子問答』)

本当にこの事は、目の前の証拠である。疑ってはいけない。

のように説教・説話集の中に用いられる語であることも事実であるが、しかしながら、それはただちに、「この神境の尊さを、ゆめゆめ疑うまいぞ」(『芭蕉句集』)には、つながらない。そこにいたるには、多少のまわり道が必要である。これを一度本来の文型に戻して、「も」と命令形との連係として見るときに、一つの微妙な意味が見えてくるであろう。「潮の花」を「うたがふ」というようなことが、われとわが心の中に、ほんの少しもきざしてほしくないものだ、という意味が。

〈潮の花〉は、もちろん、いわば見立ての比喩的表現である。潮の波頭が、白く砕け散る様を、花ノヨウダ、と言表したものであるが、実体は、いうまでもなく、海水の飛沫(しぶき)にすぎない。〈花〉とは似ても似つかぬものである。絵に描いた花、紙で作った花、ほどの相似性もないものだ。まして、春の季語であるなどということも、もとより内実のないことである。だが、〈花〉

は、和歌連歌以来、ことさらに重要に扱われてきて、ほとんど自動的に春季の意を含蓄する。そういう力を持っている。⁽⁴⁾「語のもつ、そのような効果のあり方、それが、一句において反省されているのである。」

〈潮の花〉が〈花〉であるということ、「うたがふ」というようなことが、われとわが心の中に、ほんの少しもきざしてほしくないものだ。〈潮の花〉は、ほんとうに字義どおりに〈花〉なのだ、信じていたい。〈潮が花をなして押し寄せる〉どころか、〈花が潮というかりの形をとって現前しているのだ〉と、信じて、その心持の中に、漂っていたいものだ。そんな気になる。所も二見が浦の、すがすがしい春の時節。まさに「花の(すばらしい)春」である。「潮の花もうたがふな□浦の春」の形で一句を解すれば、およそ、以上のようになるであろう。

一句は、さらに倒置された。「うたがふな」が一句の頭に出た。そのとき、右の解にいう信じていたい気持は、一層強調されるであろう。右の句形では、われとわが心を説得し、われとわが心に命令を与えるのであるが、倒置の結果、命令は一層強調され、われながら、われならぬものの命令を受けている気持になる、ということになると思われる。〈潮の花〉が〈花〉であることを、わたくしは、ほとんど、もう信じている。疑ってはならない、という命令は、われならぬところから来るように思われる、というのである。まことに、「うたがひは人間にあり。天にいつはりなきものを」(謡曲「羽衣」)である。

ここでは、比喩が、その表現・言表を経過して、ついには、逆に、その表現・言表を出発として、リアルな意味を獲得するにいたる、そのような過程が考えられている。言語が、比喩自体をのりこえて真実として眼前に浮かびあがる、その過程が反省されている。つまりは、言語のもつ象徴機能というものを、その所以を、明確に意識しているのである。そして、象徴機能の生成される所以が、何やら人為を越えたところにあるらしいということ、鋭く感じあてている。それが「神仏の威徳」だ、とは決していっ

ていない。いうところをわかりやすくするために、一句を他の形に直すならば、

(5) あなたふと浦の潮も花の春

と、いうことにでもなるだろう。しかし、そういえばほとんど姿をあらわしかける「神仏の威徳」は、もとの句形では、決してあらわれない。そこが「うたがふな」の措辞^{*}の、あやうくも微妙・絶妙のところであろう。

〈花〉は文芸の精髓であり、文芸そのことを象徴する記号でもあるが、一句においては、あくまでもその〈花〉は、ひたひたと満ちてくる〈潮〉に即して具体的に咲くのであり、満ちてくる潮の底に力動する海の力、造化の絶大な力が、〈花〉を支える。

(上野洋三「芭蕉の表現」による)

〔注〕其角——江戸時代の俳人。芭蕉の門人で、俳諧撰集『いつを昔』

を編んだ。

二見の図を拝み侍りて

——二見が浦の絵図を拝みまして。

二見が浦(二見の浦)は三重県にある名勝。夫婦岩で有名。

詞書——和歌を作った日時・場所・成立事情などを述べる前書き。

文台——連歌や俳諧の会の時に、作句を書きとめる台。

歌枕——古来、和歌によく詠まれた景勝地のこと。その名称から

連想されるイメージもよみこまれる。

垢離場——神仏への祈願や祭りなどの際、冷水を浴びて身を清め

る場所。

三津——二見が浦の付近の地名。

『山家集』——平安末期の僧、西行の歌集。

潮先き——満ちてくる潮の波頭。

『日葡辞書』——イエズス会宣教師たちによる、日本語—ポルトガ

ル語辞典。

草も木も色変れどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける

——草にせよ木にせよ、真夏の緑から今ではすっかり色が変

わってしまった。しかし、海岸に立って眺めると、波の花

ともいふべき波は相変わらず白い飛沫を上げているから、

波の花には秋が訪れないのだなあ。

常套語——ある場合にいつもきままって使う言葉。

うたがひは人間にあり。天にいつはりなきものを

——疑うということは人間にだけあること、天にはそもそも

偽りということがないのに。

措辞——言葉の使い方や辞句の配置の仕方。

造化——人為を超えたもの。

〔問1〕⁽¹⁾ 西行とのゆかりも見逃すことができないとあるが、「西行とのゆかり」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 西行が二見が浦で扇を文台にしたことから芭蕉が文台に扇と二見が浦の図を描いた点と、西行の「過る春」の歌を意識して芭蕉が「うたがふな」の句を作ったと考えられる点で、西行と関係があるということ。
- イ 西行が扇を文台にしたことから芭蕉が文台に「うたがふな」の句を書き付けたと考えられる点と、西行の「過る春」の歌に触発されて芭蕉が三津から旅に出たいと考えた点で、西行と関係があるということ。
- ウ 西行が「過る春」の歌を詠んだことから芭蕉が文台に扇の形を描いたと考えられる点と、西行の「過る春」の歌を手本にして芭蕉が「うたがふな」の句を作ったとされる点で、西行と関係があるということ。
- エ 西行が伊勢で「過る春」の歌を詠んだことから芭蕉が伊勢を旅した際に「うたがふな」の句を思いついたと考えられる点と、西行の歌と芭蕉の句に其角が関連を見いだした点で、西行と関係があるということ。

〔問2〕⁽²⁾ 五七五各句の頭韻を「ウ」で揃えるために「ウシオノハナ」といいなされたのであろう、というのであるとあるが、「五七五各句の頭韻を『ウ』で揃える」と同じ技法が使われているものはどれか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 秋風の吹上ふきあがりに立てる白菊は花かあらぬか浪の寄するか
- イ 君や来し我や行きけむおもほえず夢か現うつかねてかさめてか
- ウ ほのぼのと春こそ空に来にけらし天あまの香具山霞かぐさかすみたなびく
- エ よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見つ

〔問3〕⁽³⁾ 「潮の花」を「波の花」と解して済ませる説が多いとあるが、このことについて筆者はどのように考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「波の花」は「潮の花」とほぼ同じ状況を表しており、海辺に満ちて来る潮の波頭が白く散る様子を見たことで、「うたがふな」の句が描く海の様子をよく表現している。

イ 「潮の花」は満潮の際の波が砕け散る様子を表しており、「波の花」と解釈したのでは、「うたがふな」の句に満潮の海を見いだすことができず、句の迫力を表現しることができない。

ウ 「潮の花」は満潮の波の様子を花に見立てて表しており、「波の花」と解釈したのでは、「うたがふな」の句でうたわれる新春のめでたさを描きだすことができない。

エ 「波の花」は『古今集』以来の歌語で波頭一般を表しており、一方で「潮の花」は国語辞書に搭載されていない語であるので、「うたがふな」の句の解釈として「波の花」とする方が一般的である。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「一語のもつ、そのような効果のあり方、それが、一句において反省されているのである」とあるが、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「潮の花」という語のもつ花のイメージを喚起する力が、砕ける波を花と捉えさせることで華やかな新春の雰囲気を漂わせるように機能しているということ。

イ 「潮の花」という語のもつ海のイメージを喚起する力が、潮の波頭の砕ける様子を花だと信じていた気持ち妨げるように機能しているということ。

ウ 「花」という語のもつ春のイメージを喚起する力が、海水の飛沫に過ぎない「潮の花」をまさに春の花であると感ぜさせるように機能しているということ。

エ 「花」という語のもつ波のイメージを喚起する力が、古来波を花と見立ててめでてきた日本人の感性を再確認させるように機能しているということ。

〔問5〕 次の発言は、あなたふと浦の潮も花の春⁽⁵⁾について生徒たちが意見を出し合ったものである。「あなたふと浦の潮も花の春」の句についての説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 「うたがふな」の句では、〈潮の花〉が〈花〉であることは疑う余地のないこととして表現されているよね。「うたがふな」という言葉が、読者の読みを限定しているんだ。芭蕉の表現内容さえも変えてしまう神仏に対する畏れを表すために、筆者は「あなたふと」の句で表現しているんだと思うよ。

イ 「うたがふな」の句では、倒置によって「うたがふな」という命令が一層強調されているよね。「われならぬもの」に命令されて〈潮の花〉が〈花〉であることを疑いようもない境地にあるんだ。その筆者の感じる「神仏の威徳」の存在をわかりやすく示すために、「あなたふと」の句で表現しているんだと思うよ。

ウ 「うたがふな」の句では、比喩をリアルなものとして理解するという神仏のみが成し得ることが起きているよね。人を超えた力が「うたがふな」の句には働いているんだ。筆者はこの句に作用している神仏の力をわかりやすく伝えるために、「あなたふと」の句を作って紹介しているんだと思うよ。

エ 「うたがふな」の句では、「神仏の威徳」の存在は表現されていないよね。それが微妙・絶妙などころではあるものの、現代の私たちにはわかりにくいんだ。だから、私たちに神仏への畏敬の念を理解させるために、筆者は「あなたふと」という句を作って紹介しているんだと思うよ。

5
1
2

3

4
5